

大学入試センター試験および国公立大二次・私大

大学入試

分析と対策

英語

2017
平成29年度

学校法人 河合塾
英語科講師 江本 祐一

林啓館

この冊子の内容は次のURLからもアクセスできます
<http://www.shinko-keirin.co.jp/keirinkan/tea/kou/eigo>

1 センター試験

(1) 筆記試験の概要

2017年度の筆記試験は、コミュニケーション能力を問うという現行課程の方針に沿ったもので、出題形式も出題内容も2016年度とほぼ同様の出題だった。わずかな変更点としては、第1問で、2016年度と比べるといわゆるカタカナ語の出題数が増えたこと、第3問Cで発言者の数が6人という過去最高の人数になったこと、第5問で本文には直接書かれていない内容を問う問題が出題されたこと、第6問で、2016年度には出題のなかったイディオムの意味を類推する問題が出題されたこと、である。総語数は、2016年度の4,288語に対して、4,335語で微増。2015年度は4,385語であったことを考えると、4,000語台の前半で一定している、と言えるだろう。平均点は123.73点（2016年度は112.43点）で、2012年度以来の6割超えであった。先に述べたように第5問でやや特殊な出題がなされたとは言え、第2問がやや易化し（ただし、後述参照）、全体的に見ても解答しやすい問題が多かったことが原因であろう。配点は2016年度と同様で、音声に関する問題の配点が14点、文法・語法系の問題の配点が44点、残りの142点が読解系の問題で、読解力重視の傾向に変化はない。

(2) 設問別分析

第1問

2016年度同様に、Aが発音問題、Bが音節分けのないアクセント問題で、A・Bともほかの3つと異なるものを選ぶ問題。いずれの単語も発音・アクセント問題で問われることの多い典型的な問題である。2017年度の特徴としては、先にも述べた通り、いわゆるカタカナ語と言えるものとして、発音問題ではgear / channel / chorus、アクセント問題ではmarine / severe / unique / evidence / satelliteが出題されていることが挙げられる。ここ数年の傾向を考えると、発音・アクセント問題に典型的な単語は言うまでもなく、カタカナ語も含めて、日頃から正しい発音、アクセントを心がけておくことが必要。

第2問

Aでは、2014年度以降、2か所の空所補充の問題が引き続き出題されている。語彙にせよ、文法や語法にせよ、斬新な問題が出題される印象の第2問Aであるが、ここ数年は、普通の文法・語法問題という印象が強い。2017年度は比較的易しめの出題であった。

第2問A 問1

Today, in science class, I learned that salt water doesn't freeze 0℃.

- ① at ② in ③ on ④ with

第2問A 問8

He (A) his umbrella (B) in the door by accident when he boarded the rush hour train.

- | | |
|------------|--------------|
| ① A : got | B : caught |
| ② A : got | B : to catch |
| ③ A : made | B : caught |
| ④ A : made | B : to catch |

問1は、「～度で」という場合に用いる前置詞の選択問題で、河合塾の集めた再現データによれば、全体の正答率は60.5%であるが、現役生と卒業生の間で正答率の差が11.3ポイントついた問題。現役生の約1/4が③のonを選んでいる。前置詞を単独で問う問題は2015年度にも出題があり、この時は現役・卒業生ともに正答率は低かった。基本的な前置詞については、その根本的な意味から確認するように指導する必要があるようだ。問8は、再現データでは現役生・卒業生ともに正答率が5割を切った問題。いずれも約1/4が、②、③を選んでいいる。②のgotとto catchの組み合わせを選ぶとget O to doとなり、この部分だけ見ると形は成立するが、(B)以降にcatchの目的語がないことから、不適切であるし、そもそも「傘にcatchさせる」では意味的にも成り立たない。③のmadeとcaughtの組み合わせを選ぶとmake O doneとなるが、make oneself understood[heard]のような例を除けば、doneには純然たる過去分詞が置かれることはないという、やや細かい知識を用いて排除する。このように見ると、この問題で正答率が低くなるのもうなずける。このような細かな文法・語法についての正確な知識が問われるのがここ数年の傾向ではあるが、I got my umbrella caught in the door.のような英文はいわば暗唱例文であり、他の選択肢が不適切な理由がわからなくても正解を得られるくらいにまで基本例文は暗唱させておきたい。

Bの語句整序問題は、2016年度同様に3問とも6つの選択肢で対話文形式の出題。問1 (find it difficult to do)、問2 (cost O₁ O₂) はいずれも、再現データでは8割を超す正答率であるが、問3は38.9%の正答率で、2017年度の問題の中で最も正答率が低い問題となっている。

第2問B 問3

Rita : Daniel and I have to go home now.

Father : Oh, 22 23 usual? I thought you were going to stay for dinner.

- ① are ② earlier ③ how come
④ leaving ⑤ than ⑥ you

22・23のセットでの正答率は38.9%であるが、23単独では7割を超す受験生が正しく②をマークしている。22で最も多いマークは①で、how come you are leaving ...とすべきところを、how come are you leaving ...としたことが正答率の低さの原因であると考えられる。突き詰めれば、「how come + 肯定文の語順」という語法に関する知識不足ということになる。how comeの語法を問う問題として第2問Aで出題されていたとすれば2点の減点ですむが、第2問Bでの出題であるために、4点の減点になっている。

Cでは2015年度以降、応答文完成問題が出題されている。2016年度は文法的にも意味的にも成立しそうな組み合わせが複数あり、文法・語法の知識だけでなく、対話の流れを意識しなければならない問題となっていたのに対して、2017年度はremember to *do*とremember *doing*の区別、byとtillの区別、仮定法過去の文の完成、interestedとinterestingの区別、間接疑問の語順、prevent O from *doing*とpersuade O to *do*といった文法・語法の知識を問う性質が強い出題となっている。もちろん、文意がわかっていなければremember to *do*とremember *doing*の使い分けもできない以上、対話の流れを意識しなければならないことは言うまでもない。

第2問C 問3

Fritz : Some students said they heard a rumor about Naoki.

Sophia : I heard it, too, but it's false. I wonder 26

- | | | | |
|---------------------|---|-----------------|---|
| (A) how can we | → | (A) persuade it | → |
| (B) how we can | | (B) prevent it | |
| (A) from spreading. | | | |
| (B) to spread. | | | |

再現データでの全体の正答率は62.2%であるが、2017年度の問題の中で、最も現役生と卒業生の正答率の差が開いた問題。具体的には現役生の正答率が58.7%、卒業生の正答率が70.8%で、その差は12.1ポイントであった。正解はhow we can prevent it from spreading.となる

(B) → (B) → (A) であるが、最も多かった誤りはhow can we prevent it from spreading ((A) → (B) → (A))であった。prevent A from *doing*とするかpersuade A to *do*とするか、といった判断は正しくできているが、wonderに続く名詞節内の語順で失敗しているのであり、先に挙げた第2問Bの問3に通じるところがあり、興味深い。

第3問

Aの対話文完成問題は、2017年度は状況把握力を問う出題となっている。対話の分量は増えているが、比較的わかりやすい出題で、問2は再現データではすべての問題の中で最も正答率が高く、約95%が正しく答えている。

Bの不要文選択問題は、2016年度同様に、選択肢となっている文が連続していないものも出題された。2016年度同様に、比較的解答しやすい問題で、問1は9割を超える正答率であった。2015年度の問3をピークに問題が易しくなったとも言えるが、このタイプの出題も定着し、過去問を始めとする練習問題も豊富になり、受験生は十分な対策ができるようになってきているとも言えよう。

Cの発言の主旨選択問題では「市の発展」をテーマにした住民の話し合いでのやりとりの一部からの出題。前述の通り、2017年度は発話者が過去最高の6人であった。2016年度と同様に、34は複数の発言者の意見を集約して答える問題が出題されており、32と33の正答率が8割を超えているのに対して、34は再現データでの全体の正答率が50.4%で各段に低くなっている。

第4問

Aでは「校庭の種類が生徒の運動に与える影響」を論じた英文と2つのグラフを用いた問題が出題された。グラフ中の項目を埋める問題、部分の理解を問う問題、パッセージ全体のテーマを問う問題、最終パラグラフに続くパラグラフのテーマを答える問題という出題内容で、2016年度と同じ。本文の中心的なテーマからややずれた内容のパラグラフが含まれ、扱われている情報が多岐に渡った2016年度よりも、全体としては解答しやすい問題だった。

Bでは、2014年度以降ウェブサイトを用いた問題が出題されている。2017年度は「ビデオ制作コンテストの要項」を述べたもの。2016年度は3行に渡る設問文が2問あったのに対して、2017年度はそのような設問文は1問のみ。従来出題されることの多かった計算の絡んだ出題はなかった。全体として比較的解きやすい問題であった。

第5問

2016年度に続いて物語文の読解問題が出題された。

2017年度は、主人公が朝起きるとネコになっているという特殊な状況設定の物語であると同時に、5つの設問中、問2, 3, 4の3問が本文中にはっきりと記述されていない登場人物の心情を問う問題であったために、2016年度よりも難度は上がっている、と言える。ただし、再現データでの正答率はいずれも70%を超えていた。

第6問

「友情を長持ちさせるための助言」に関する論説文からの出題。2016年度には出題のなかった下線部の意味類推問題として、swallow one's prideの意味を問う問題が出題された。下線部を含むパラグラフのテーマと、後に続く具体例から意味の確定は比較的容易で、再現データでの正答率は約70%であった。他の設問は、Aはパラグラフ単位の内容一致、本文全体のタイトルの選択、Bはパラグラフごとの要旨の選択で、2016年度と同じであった。本文全体のタイトルを選ぶ問題は2016年度から新たに出現されるようになったものであるが、2017年度は現役生と卒業生で正答率に11.0ポイントの差がついた。現役生、卒業生ともに最も多かった誤りは、③のStrength as the Key to Friendshipであったが、実際には、友情を長続きさせるために重要なのは強さだ、といった趣旨のことは本文中には述べられていない。Strength, Key, Friendshipという単語だけを見て、何となくこの選択肢を選んだのかもしれない。as「…としての」を読み飛ばした、あるいはわからなかったのであれば、第2問Aの問1で見たように、前置詞の知識が不十分、と言えるのかもしれない。

1つのパラグラフ内で文と文のつながりを考えながら読み進め（第3問B）、1つパラグラフが終わるごとにその内容を確認し（第3問C）、次のパラグラフの内容をある程度まで予測し（第4問Aの問4）、さらには1つのパッセージ内ではパラグラフとパラグラフのつながりを考えながら読み進める（第6問B）、といういわば当たり前の読み方が求められ、またそうすることで高得点が得られることが、センター試験の読解問題の特徴である。このような読み方をすることで、全体の文意がとれるため、細部に対する理解も深まり、未知の表現が出てきても、立ち往生することなく読み進めることができる。

例年本稿で指摘している通り、読解力の強化には、文法的知識と語彙力を高めるとともに、論説文をはじめ、エッセイや物語文、さらにはウェブサイトの記事など、さまざまなタイプの英文を読むことが必要である。その際には、よくわからない部分があっても、少なくとも1

つの段落は最後まで読み切り、全体の内容を把握する訓練が効果的であろう。そのためには、比較的易しめの入試問題でパラグラフごとに内容一致問題がついたものなどを利用することが考えられる。また、読解系の授業の予習の際は、あらかじめ生徒に制限時間を告げておき、まずは辞書なしで英文を読み、設問に答えさせる練習、つまり「予習は模擬試験だ」という姿勢での練習も効果的であろう。私自身の場合、生徒には、「予習段階で辞書を使う際は調べたい単語の半分だけを調べ、調べた単語は絶対にその場で覚えること。残りは文脈から推測すること」という指導をしている。外国語である以上、未知の単語があるのは当然のことで、それにいかに対応するかという訓練をさせることが必要である。また、一度読んだ英文を繰り返して読む、という訓練を嫌がる生徒もいるが、既習英文を繰り返して読むことで、読解のスピードが上がるとともに、語彙の知識も定着する。その意味で、授業で扱った英文や自分が問題集などで読んだ英文は繰り返して読むように指導すべきであろう。これらはセンター試験に限らず、国公立大の二次試験や私大の試験対策にも有益なはずであるし、たとえ入試で英語が必要なのはセンター試験だけ、というような生徒でも総合的な力が高まるのではないだろうか。

（3）リスニング試験

2016年度に、センター試験でリスニング問題が出題されるようになって以来初めて大きな変更があった。2017年度は、これとほぼ同じ出題内容であった。わずかな変更点としては、第3問Bでイラスト内の空所補充問題が出題されなかったこと、第4問Aの英文がエッセイから伝記に変わったことが挙げられる。読み上げられた語数は、2016年度の1,129語に対して1,145語、設問と選択肢の語数は、2016年度の576語に対して502語で、これらの数字だけを見ると受験生の負担は減っているようであるが、平均点は2016年度の30.21点に対して、28.11点。平均点が6割を下回ったのは2012年度以来のことである。平均点が下がった理由としては、例えばWhen he was 12 years old, he was blinded in both eyes during an experiment in science class.という読み上げられた英文から、What caused Wilson's blindness?に対する解答として、A childhood accidentを選ぶ問20や、..., he was shocked to find widespread blindness not caused by accidents, as in his own case, but resulting from the lack of effective treatment for certain diseases.とそれに続く具体例から、What did blindness in Africa shock

Wilson? に対する解答として、Most cases were preventable.を選ぶ問21など、表現の言い換えが従来以上に多く出されたことが考えられる。聞こえてきた表現がそのまま解答となるのではない問題が多かったのが、特に2017年度の特徴だった。また、問5のa third of themが「その1/3」の意味であることがとれなかった受験生も多かったと考えられる。

例年、本稿で指摘している通り、リスニング問題では、落ち着いて最後まで聞く姿勢が必要で、平常心で試験に臨めるレベルにまで聞き取りの力を高めておかなければならない。対策としては、①文字を見ないで繰り返し聞き、かなりの部分が聞き取れるようになるまで文字を見ない。②問題に答える。③文字を見て、聞き取った内容を確認する。④書き取る、という一連の練習を積むのが望ましい。①でいう「かなりの部分が聞き取れるようになるまで」というのは、個人的には「9割方聞き取れるようになるまで」と考えている。やはり未知の単語や表現は聞き取ることができないであろうから、そのようなものを除いた部分すべてが聞き取れるまで、ということである。また、④の書き取りまではセンター試験では必要ないという意見もあるだろうが、書き取ることによって、聞き取りに対する自信が深まること、語彙力や文法力の向上（聞き取れなかった部分を文法の知識で修復する）や、正しい綴りの定着につながるなど、その効果は大きいと思う。

選択肢の英文をあらかじめ読んでおくことなど、リスニング問題には読解力が影響を及ぼす要素も大きい。そもそも読み上げられた速度で英語を理解できなければ、対話に続く表現を決めることもできないし、聞き取った英語を言い換えた選択肢が正解となる問題には対応できない。正しく速く読むということは、リスニング問題で高得点を取るためにも必要である。そのためには、筆記試験のところで述べた既習英文の反復読みが効果的である。また、語彙の知識がなければ、せっかく英語が聞き取れても正解を得られないという結果になりかねない。

2 国公立二次試験

(1) 概観

一部の大学で出題内容に多少の変化があったが、2016年度同様の出題形式を踏襲した大学が多かった。現行の学習指導要領をふまえた出題は従来からすでにいくつかの大学でなされていたが、2016年度に新たに出題して

2017年度も継承した大学も多く、「読む・聞く・書く・話すの4技能の統合」、とりわけ「読む・書く」を意識した出題として、英問英答問題や、対話文を利用した問題が多くなっている。ただし、2016年度に意欲的な出題をしてはみたものの、受験生の現実との乖離^{かいり}が見られたためか、ややトーンダウンした感のある大学も見られた。

2017年度の主要な国公立大学で出題形式や内容について目についたものを取り上げる。

東京大学：毎年のように出題形式に変化が見られるが、2017年度は第1問(B)が段落補充問題から文補充問題に変わった。また第2問(A)が、ここ数年続いたイラストや写真を用いた問題から「あなたがいま試験を受けているキャンパスに関して、気がついたことを一つ選び、それについて60～80語の英語で説明しなさい」という出題に変わり、第2問(B)は手紙に対する返信の完成問題になった。

京都大学：2016年度に大きく出題形式が変わったが、2017年度は、対話形式の自由英作文も含め、それを踏襲した出題形式の問題であった。空所補充問題は、2016年度の形容詞から、副詞、特にいわゆるディスコースマーカーを中心にしたものが出題された。下線部和訳問題では、例年以上に構文把握力が問われる問題が出題された。

東北大学：2016年度に全体の記述量が増え、客観問題が減り、全体の難度は増したが、2017年度も同様で、本格的な記述問題が引き続き出題された。2016年度に出題のあった文整序問題はなくなったが、対話を読んだうえで自分の意見を述べる技能統合を意識した問題は引き続き出題されている。2016年度は「スマートフォンの使用は時間の無駄か節約か」、2017年度は「学校の制服の是非」といったテーマで、身近なテーマについて掘り下げて書くことが求められている。

一橋大学：従来、3つのテーマから1つ選んで英文を書く形式の自由英作文が出題されてきたが、2015年度にはテーマの1つに絵画が出され、2016年度は3つのテーマが全て写真や絵画になったのに対して、2017年度は、英文で与えられた3つの状況から1つを選び、その当事者にあてた手紙を書く問題が出題された。求められる語数は2016年度同様に100～130語である。

名古屋大学：2016年度に出題された長文中の文整序問題の出題はなくなった。本文に関連する内容を英文で書く自由英作文は2016年に続いて出題された。和文英訳問題では、2016年に続いて英訳しづらい日本文の出題が続いている。

大阪大学：例年通りの出題であるが、自由英作文は、インターネットのQ&Aサイトに寄せられた中学生の相談に対するアドバイスを書く問題で、大阪大学としては新傾向。

神戸大学：2016年度に問われた「英語圏の社会に関する背景知識」「ある状況における自らの行動を考え英語で表現」「イラストなどで与えられた情報を元に英語で表現」（いずれも神戸大学発表）といったポイントは、2017年度には出題がなくなった。

広島大学：例年通りの出題。ただし、図表・イラストを使った自由英作文の問題で与えられた表が、従来になく情報量の多いものだった。

九州大学：2016年度に読解問題の語数が対前年比で約350語増えたが、2017年度はさらに約300語増え、長文化の傾向が続いている。従来から出題のあった自由英作文は、2016年度に長文読解問題の設問の1つとなったが、2017年度は独立した問題に戻った。

そのほかでは、2016年度に設問文が全て英語になり、設問も英問英答形式になり、解答用紙には英語以外を記述する部分がなくなった金沢大学は、2017年度もこの形式を踏襲している。小樽商科大学も、金沢大学同様に解答用紙には英語以外書くことのない出題を続けており、思考力を試す独自の問題として、選択肢の英文が解答となるような問題文を作成する問題や、本文の内容に不一致な選択肢を訂正させる問題など独自の出題が続いている。東京外国語大学では、読み上げられる英文を聞いて、英文で要約する問題と、自分の意見を述べる英作文の出題が続いている。また、名古屋工業大学では、合教科・合科目型の問題として、数学と英語の合教科を意識した出題が続いている。

（2）読解問題

2016年度同様に、金沢大学の読解問題を取り上げる。紙面の都合上、問題文自体は省略し、設問の一部のみを掲載する。

I Read the following passage and answer the questions in English.

<本文省略>

Question 1 : Based on the passage, answer questions (A) to (C) in English.

(A) What are the two trends mentioned in the passage that are having a great influence on the job market?

(B) What is an advantage smart machines may have over humans in professional fields such as medicine and law?

(C) What ability is needed to cope with rapid changes in society and technology?

Question 3 : Based on the passage, what kind of changes do you think should be made to schools (for example, high school) in order to prepare students for the jobs of the future? Write your ideas in 30–40 English words.

Question 1 では本文の内容説明が求められ、Question 3 では本文で書かれている内容に基づいて、自分の意見を書くことが求められている。自分の意見を書く問題は設問 I でも出題されている。

同様の「読む・書く技能の統合」を意識した問題は、北海道大学、旭川医科大学、小樽商科大学、札幌医科大学、東北大学、宮城教育大学、東京大学、東京医科歯科大学、東京農工大学、筑波大学、名古屋大学、愛知教育大学、浜松医科大学、静岡大学、京都府立大学、山口大学、九州大学、熊本大学、長崎大学などでも出題されており、今後も増加すると考えられる。

従来通りの下線部和訳問題として、京都大学の問題を取り上げる。先にも述べた通り、例年以上に構文把握力が問われる問題が出題された。

II 下線部 (a)

Another, more thorough way of avoiding full immersion in the present is by seeing all of life as stages of preparation, ranging from preparing for dinner to preparing for life in the Hereafter, with preparing for final exams falling somewhere in between.

河合塾の集めた再現答案では、特に最後のwith preparing for final exams falling somewhere in betweenの部分の出来が良くなかった。これはwith preparing ... falling ...という付帯状況のwithを用いた表現であるが、多くの受験生はwith preparing ...を「…の準備をしながら」ととったようである。英作文で「…しながら」をwith *doing*で表してはいけない、という指導は受けてきたはずなのだが、その知識が読解問題ではうまく活用できなかったようだ。

（3）表現力

2016年度は「読む・書く技能の統合」を意識した問題が増え、写真やグラフ、地図などのビジュアル的な要素

を取り入れた出題が増えたのに対して、2017年度はビジュアル情報を用いた出題は減少した。特に、東京大学、一橋大学といった有力大学が、偶然とはいえ、ビジュアル問題を同時に取りやめ、どちらの大学もきわめて特殊な状況下で手紙を書く問題になったことは注目に値する。神戸大学も2016年度の地図を用いた出題から、具体例の説明と自分の意見を書く問題に変わった。また、2016年度に、与えられたイラストを元に人物の感情、現状、過去に起こったこと、今後起こることのすべてを盛り込んでストーリーを書かせる問題を出題した金沢大学も、2017年度は「自動運転車が実用化された場合に起こる変化」について、与えられた5つの分野から1つを選び、起こると考えられる変化とその理由、影響について書く問題に変わった。これが一過性のものなのかどうかは判断できないが、2018年度入試に対する備えとしては、ビジュアル情報に基づく作文の対策はやはり必要であろう。

3 私立大学

私立大学では空所補充、下線部の言い換え、内容一致などが出題の中心である。空所補充や言い換え問題では、単語や熟語等の語彙的知識をそのまま問う場合と、文意を把握したうえで未知の（あるいは難解な）語句の意味を推測する必要がある場合があるので、基本的な語彙力の強化と英文内容の理解力を高めておく必要があるという点では、国公立大学の場合と違いはない。国公立・私立を問わず、読解問題の長文化が進んでいるが、客観問題中心の私大の問題は1題の英文量が多いだけでなく問題数が多いのも特徴で、限られた時間で設問に答えるトレーニングが絶対に不可欠である。

2017年度に出題傾向が変わった主要な大学を挙げる。

慶應義塾大学：文学部でパラグラフ整序の問題が出題されたが、選択肢は3つで時系列に沿って並べれば正解が得られるもので、比較的易しい問題。法学部では発音問題が出題され、母音の発音が問われていた。また、文法問題として正誤問題が出題された。さらに、医学部では、内容説明問題がなくなり、和訳問題の比率が高まると同時に、近年出題のなかった段落整序問題が出題された。

学習院大学：国際社会学部で、中文空所補充の形で単語の綴りを完成させる問題が出題された。

中央大学：理工学部で和訳問題の出題がなくなり、全て

マーク式の出題になった。

早稲田大学：法学部で、会話文中の和文英訳問題の出題がなくなり、グラフの読み取りとそれに関連する自由英作文が出題された。また、文学部で、従来から出題のあった200語程度の英文を1文で要約する問題で、書き出しが与えられ、語数制限が設けられ、解答しやすくなった。これは文化構想学部も同様である。

そのほか、特徴的な出題としては、名城大学でクロスワードパズルの完成問題が出題されたこと、愛知大学でLINEでの会話画面を模した形の会話問題が出題され、u know (= you know) やu r (= you are) などといった表記が用いられていたことが挙げられる。また、英文で与えられた料理のレシピを読み、できあがる料理を写真で選ぶ問題も出題されていた。

江本 祐一（えもと・ゆういち）

東大、京大、医進の授業を主に担当。京大英文解釈、京大英作文などのテキスト、京大即応オープンの作成メンバー。

著書：「英語暗唱文ターゲット450」（旺文社）、「入試英単語の王道」（河合出版・共著）、「センターはこれだけ」（文英堂・共著）など。



—— 知が啓く。 ——

URL <http://www.shinko-keirin.co.jp/>

平成 30 教 内容解説資料

本 社	〒 543-0052	大阪市天王寺区大道 4 丁目 3 番 25 号	TEL(06)6779-1531	FAX(06)6779-5011
東京支社	〒 113-0023	東京都文京区向丘 2 丁目 3 番 10 号	TEL(03)3814-2151	FAX(03)3814-2159
札幌支社	〒 003-0005	札幌市白石区東札幌 5 条 2 丁目 6 番 1 号	TEL(011)842-8595	FAX(011)842-8594
東海支社	〒 461-0004	名古屋市東区葵 1 丁目 4 番 34 号双栄ビル 2 階	TEL(052)935-2585	FAX(052)936-4541
広島支社	〒 732-0052	広島市東区光町 1 丁目 7 番 11 号広島 CD ビル 5 階	TEL(082)261-7246	FAX(082)261-5400
九州支社	〒 810-0022	福岡市中央区薬院 1 丁目 5 番 6 号ハイヒルズビル 5 階	TEL(092)725-6677	FAX(092)725-6680